

## Suggestion of added value by bevacizumab to chemotherapy in patients with unresectable or recurrent small bowel cancer

大嶋, 琴絵

<https://hdl.handle.net/2324/4474896>

---

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (医学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

(別紙様式2)

氏名	大嶋 琴絵
論文名	Suggestion of added value by bevacizumab to chemotherapy in patients with unresectable or recurrent small bowel cancer
論文調査委員	主査 九州大学 教授 馬場園 明 副査 九州大学 教授 中村 雅史 副査 九州大学 教授 加藤 聖子

### 論文審査の結果の要旨

申請者らは、日本の6施設において2008年から2016年に進行小腸癌に対して化学療法を受けた33例の患者について後方視的に背景因子や臨床経過、転帰に関して調査した。

結果は、年齢中央値は65歳。原発巣は十二指腸21例、ファーター膨大部3例、空腸7例、回腸1例であった。一次化学療法はmodified FOLFOX6療法、カペシタビン+オキサリプラチン療法、S-1+シスプラチン療法が各々13例、1例、4例に施行された。奏効率は25%、無増悪生存期間中央値は6.0カ月であった。全生存期間中央値は13.0カ月であった。

33例のうち9例がベバシズマブ (Bev) 併用の化学療法を受け、3例がセツキシマブ併用の化学療法を受けた。Bev併用の化学療法を受けた患者、Bev非併用の化学療法を受けた患者の全生存期間中央値はそれぞれ21.9カ月、11.4カ月 ( $p=0.179$ ) で、予期せぬ重篤な有害事象は認めなかった。本研究の結果、進行小腸癌に対し、ベバシズマブ併用の化学療法が予後の改善に寄与する可能性があることが示された。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、研究結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。なお、本論文は共著者多数であるが、予備調査の結果、申請者が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。